廣池千九郎が重視した「精神作用」とは何か

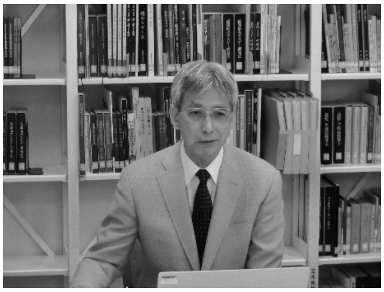
小山高正

一　はじめに

皆様こんにちは。道科研の小山高正と申します。本日は「廣池千九郎が重視した「精神作用」とは何か」ということで発表をさせていただきます。二〇一九年からですのでもう四年になりますが、道科研メンバーで、『道徳科学の論文』（以下『論文』）の重要な箇所を抜粋していくという作業をしております。第一四章と一五章につきましては、既に『品性をつくる人間学』というテキストになり、今、論文講座で使われているようなものの基をつくらせていただきました。今年度は第一章と二章を済ませることができまして、ただいま第三章から第七章に取り組んでいるところです。という訳で、本日はとてもよい機会を与えていただきました。

先ほど、立木先生が第三章を中心に報告をされましたが、今回私は、第四章を中心に、点検と申しますと少し語弊がありますけれども、とりあえずここでは、第四章を見直していく作業をさせていただきたいと思います。では、本日の発表全体を最初にお示しします。本日の発表に「廣池千九郎が重視した「精神作用」とは何か」というタイトルをつけましたが、少々失敗したなと後から思いました。

と申しますのも、後でも触れることですが、廣池先生はかなり広い意味で精神作用という言葉を使っています。そこで、最初に多少とも精神作用についてある程度限定をしておかなくてはいけないということで、その部分を初めに持ってまいりました。そこで『論文』の中に出てくる精神作用についてまとめます。さらに本日の発表での精神作用はこの範囲ですと申し上げ



小山高正客員教授

てから本論に入ります。

本論は三つの視点から精神作用を考察します。一つが心身、心と体、つまりこれは心と脳の問題ですが、これについて議論します。それから、二つ目が、精神作用が健康・長寿に及ぼす影響についてで、これについては先ほど犬飼所長の始めの言葉にもありました、廣池先生が後進に託した三四項目の中に、これに関わるものが五項目ほどあります。ある意味ではこれが第四章の中心テーマです。それから、三つ目が、廣池先生が精神作用のうちの感情という作用に注目していたということをとりあげたいと思います。そして最後に簡単なまとめをすることにいたします。

二　『論文』の中の「精神作用」について

まずは、『論文』の中に出てきます精神作用という言葉についてです。その多くの箇所で精神作用と行為、もしくは精神作用と行動ということがセットで使われています。ここでいう精神作用と行為、精神作用と行動という言葉では、行為とか行動に重点があるわけです。しかし、行為や行動を決定するという意味で精神作用が重要であると廣池先生は思っていましたので、行為、行動の前に精神作用を持ってきまして、セットとして使っているわけです。もちろん単独でも多く用いられています。その場合は、精神作用が、心遣いとか、行為を司るもの、動機、意思決定、それからある意味では人間の進化した脳という意味でも使われています。

さらに八冊目（⑧三八〇―三八一）（以下丸数字は冊数を、その下は掲載頁数を示す）では、「感情・情緒・観念・思想・信仰もしくはその他の精神作用」というところが出てきまして、そこを見ますとやはり精神作用を非常に広い意味で使っていることがわかります。また、九冊目の初めのところ（⑨三五―三六）では「精神作用もしくは心遣い」について明確に述べているところがあります。「人間のすべての行為の原動力たるところの知覚・認識・感情及び意思のごときものの全ての精神的機能の発作状態を含んでおる」のところですが、つまり廣池先生の精神作用は、今日の心理学でいう感情、注意、認知、思考、さらにそれは知覚とか記憶とか意思決定を含んでいるわけですが、そういうものを含めた非常に広範囲の意識活動を指していることがわかります。

それから、第四章の初めのところで次のことが述べられています。「自然科学の発達に伴うて、人間の精神作用もまた自然

科学的に研究せらるるようになり、且つその研究において新しい方法が採用せらるるに至ったのです」（②六）。心理学は非常に幅広い学問ですけれども、今ではどちらかというと社会科学に分類されることが多いのではないかと思いますが、廣池先生が明治の後半に心理学に接した頃は、やはりこの自然科学であったというわけです。ということで、本日私の発表で扱う精神作用というのはこういう背景がありますということを説明をいたしました。そういう自然科学的な範囲の精神作用ということになります。ということで本論に入ります。

三　心—身（脳）問題

まずは心身問題、心脳問題です。皆様のお手元の資料に『論文』第四章の目次を示した表が挟まれています。二ページにわたっています。その表の左側に「内容」と書かれていますが、第四章の内容を六つに分けています。まずは心理学の歴史、第一項と二項で心理学の歴史が書かれています。その次に第三項では適応過程もしくは心の進化ということが扱われています。

それから第四項、五項では心身問題、つまり心脳問題が扱われます。そして、第六項から九項までが心身相互作用です。さらに、精神作用の物質支配ということが第一〇項で扱われてまして、最後の結論が第一一項になります。ここで、「たとい先天的原因は良好ならざるも、これを回復することは自己の現在の心一つにて決定することです」（②一八四）という結論に至ります。

この結論を踏まえて、精神作用には知的作用と道徳的作用があって、実は、人間は知徳一体の存在であるということが次の第五章で論じられます。さらに第六章、これは人類学的もしくは文明史学的研究になりますが、それから第七章の社会科学的研究へと議論が進められていくということになりますので、この第三章と四章というところが非常に重要な自然科学的な根拠を示す箇所となるわけです。

廣池先生は、古来哲学で議論されてきた唯物論、それから唯心論にも組みしませんということを第四項、五項の初めのところで述べています。それで、さらに近代心理学が現われてから精神物理的並行説、つまり心と体（この場合は脳と考えてよい）が別個に存在して、脳で生じた現象と相関して心に同じ現象が生じる、つまり脳の影響によって心に同じ現象が生じるという並行説です。ところが、そこには相互に影響し合うということが未だ想定されていません。

廣池先生は、当時の心理学の現状から見てこの説が比較的穏当な説として考えたわけですが、やはり先生もしっくり来ていないことは第四項、五項を読みますと分かります。特に、相互に影響し合うことが想定されてないのですから、それは廣池先

生が考えていた心身の相互作用という意味では、ちょっと不足の部分ではないかと思います。先ほど発表された立木先生が、最近の脳科学からこの心脳問題に取り組んで、廣池先生はこういうことを考えていたのではないかということを提案してくれています。それは、心というものを、ここでは意識と考えてもいいかと思いますが、それは脳活動で創発する情報機能ではないかということを提案しています。しかし、この創発するという機能が、ちょっと聞いただけではぴんと来ないのではないかと思いまして、私のよく知る心理学者の苧阪直行さんが提案している意識の三層モデルを使って創発の様子を説明したいと思います。それが上の図1になります。

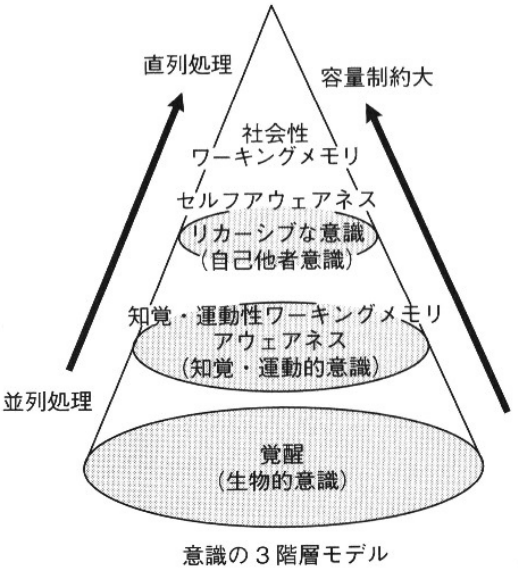


図１　意識の３層モデル
（苧阪直行・越野秀哉 2018、p. 12）

　この一番下、第一層にあるのは、覚醒水準というものを決める非常に生物的な意識の層です。脳の一番下にある脳幹というところがそれを担っているわけですが、そういう層になっています。そして、ここの神経活動から創発されていくこの上の層に知覚・運動的な意識というものがあります。この知覚・運動的な意識によって、周りの世界を初めて認知できるようになります。ここで、初めて自分で意識が働いていることを自覚できるわけです。

　さらにそこから創発される第三層になりますと、自己、他者を意識できるものになります。リカーシブな意識と書いてありますが、リカーシブというのは自分に返ってくるという意味で、思考が自分に返ってくる、つまり自己意識が発生するということです。同時に他者の心を読む、心理学ではそれをメンタライジングと呼びますが、「心の理論」ともいいます。また相手の心を読むことからマインド・リーディングでもいいのですが、他者の心を想像する心的能力が現われるわけです。この段階になりますと、まさに人間独特な意識となり、脳容量がかなり必要になってくるということになります。

　このような形で意識、つまり心が発生することになり、それが立木先生の言う「創発する情報機能」ということになるのか

と思います。ということで、立木先生の提案に戻りますが、先生は代表的な脳科学者としてエクルズとスペリーの説を紹介しています。ここでは脳という物質と心を別々なものとして捉える、つまり二元論か、分けずに考える、つまり一元論という違いはありますが、いずれにしても心、つまり意識というものが脳の神経活動から創発されたものであって、心を単なる物質の活動として捉えずに、創発された情報機能を担うものとして捉えることを提案しているのです。以上のことにご興味ある方は『モラロジー研究』二七号（一九八八）にあります立木論文をぜひお読みください。現在、『モラロジー研究』のバックナンバーは道科研のホームページからダウンロードして読むことができますので、どなたでもお読みいただけます。

　廣池先生は第九項までの精神作用についての議論を経て、第一〇項でもう一度この心脳問題に触れています。精神が物質を支配するものであることを確認しているわけです。先ほど紹介しました第四項、五項が二三頁割かれているのに対して、この第一〇項は三二頁ありますから、先生が新たな視点から唯物論批判をしていることが分かります。近世における機械論的唯物論があまりに人間を単純化したという不合理を批判していることはもちろんですが、心をもって一個のもののごとく考えた唯心論もまた不合理であると批判しています。第九項までの議論を経てこういう結論を掲げているわけです。

　ここでの議論も第四項、五項と同じように、非常に議論が難しいのですが、新たな視点として構成原理と既成原理ということを取り上げています。ここは第三章の遺伝のところと関係が深いのですが、生得性と獲得性、つまり本能と学習についての議論になります。人間のように知能が発達している生物は、学習による適応で生きているのです。つまり人間に至ってさらに精神作用が重要になったということを強調しています。

　そして、それは集団とか社会においても同じで、そこにおいても精神的要素が重要であることを強調しているのです。そのようなことを前提にしながら第一一項の結論、先天的原因がいろいろあろうとも、自分の運命は心一つにて決定するものであるというところをおっしゃっているわけです。さて、いよいよ精神作用の因果律の話に入りたいと思います。

四　心身相互作用（精神作用が健康・長寿におよぼす影響）

　第六項から九項までは心身相互作用について議論をしていますが、九八頁あります。この第四章は全体で一八二頁ですので、そのうちの半分以上がこの心身相互作用の議論に割かれていることになります。それだけ重要なテーマであるのは、それが因果律を科学的に証明する一つと位置づけられたからです。

廣池先生は、明治三七年頃に日本で初めて心理学研究室を開いた東京大学の元良勇次郎教授のところで心理学の指導を受けています（立木二〇一四）。元良教授が開いた実験室というのは、精神物理学の実験室でした。しかし、『論文』の中で実験心理学と廣池先生が書いているところは、ドイツの心理学者であるヴントのいう生理学的心理学を中心にしています。そういう意味で生理学に関心を持たれていたことがそこで分かります。第七項の心身相互作用で扱われている内容の多くは今日でいうストレス研究です。現在のストレス研究を始めたのはハンス・セリエというカナダの生理学者ですが、セリエは一九〇七年の生まれです。オーストリア生まれでアメリカへ移住した人ですので、そういう意味で発表が遅れたのかもしれませんが、カナダに行ってからこのストレス研究を始めました。もう少し早く生まれていれば、『論文』でも取り上げられて、さらにこの第四章もしくは第七項がより深いものになったのではないでしょうか。

廣池先生が引用している生理学者のウォルター・キャノンは情動の中枢説を唱えました。後に図で示しますが、一九六〇年から一九七〇年代の精神身体医学、つまり心療内科（池見西次郎一九六三、一九七三、一九七七）の理論を支えたのはキャノンやセリエによる生理学的知見です。

つまりストレスへの緊急反応と抵抗反応です。キャノンが主として主張した緊急反応の軸というのは、自律神経系を介してそれが体の臓器に与える影響、例えば緊張したときに心拍が速くなるとか呼吸が速くなるとかですが、それは自律神経系を介して出ることです。もう一つ、セリエは、体全体の防衛反応として抵抗反応の軸があることを示しています。ストレスが視床下部から下垂体、そしてそれが副腎を刺激してホルモンが分泌されて、各臓器に影響を与えるという抵抗反応を起こす、ということをセリエは言います。こういう図式を中心に一九六〇年代、七〇年代の精神身体医学、つまり心療内科の研究が行われました。

つまり、この時代の精神身体医学というのは、精神神経内分泌学的知見に基づいた医学であったと言えるわけです。しかし、一九八〇年代になりますと、従来の行動、神経、内分泌の連携に加えて、免疫機能をそれに統合する試みがなされ、精神神経免疫学が確立しました。それを表したのが次頁上の図２です。

従来の精神神経内分泌学に免疫系、ここでは自然免疫のマクロファージと、それが作用物として出すサイトカインというホルモン様物質が免疫系に影響を与えて、そしてさらにそれが脳の物質に種々の影響を与えます。その様子をこの図２にまとめてあります。

例えば、脳下垂体について見ると、そこから分泌されるスト

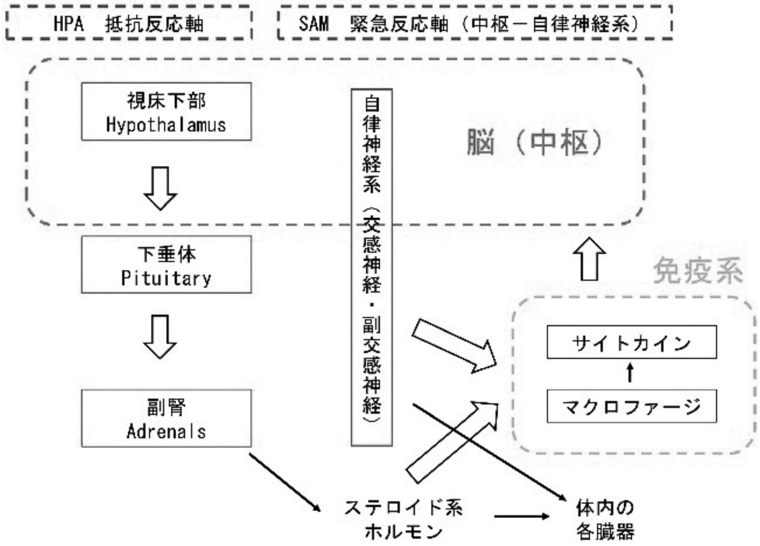


図２　精神神経内分泌と免疫機能の相互作用
（Song & Leonard 2000, p. 29 を改変）

レスホルモンが免疫能を低下させる一方、成長ホルモンは逆に活性化させる。それから、抵抗反応の結果産生される副腎皮質ホルモン（副腎から出るステロイド系のホルモン）は免疫能を実は低下させてしまう。また、緊急反応としての交感神経の活動は免疫能を低下させるが、副交感神経は免疫能を活性化させる。こういうような研究が盛んに一九八〇年代から行われるようになりました。このように、廣池先生が提案したことは、今は精神神経免疫学というような形で発展している。今後も引き続き、我々はそれを注目していく必要があるということです。

五　精神作用の中の感情作用に注目

次に、廣池先生が精神作用の中の感情という作用に注目したということで、ここからは話題が感情に移ります。先ほども引用をした九冊目の三五頁に、「本書にしばしば用うるところの「精神作用」もしくは「心遣い」と称する語の意味に関する説明…従来の倫理学にいわゆる動機及び目的を含むはもちろん、人間のすべての行為の原動力たるところの知覚・認識・感情及び意思のごときもののすべての精神機能の発作状態を含んでおる」（⑨三五―三六）とあります。

ここでいう発作状態というのは、発現した状態ということです。この一節から、廣池先生が言われている精神作用は今日の

心理学でいう感情、注意、認知、思考を含めた広い範囲の意識活動を指していることが分かります。第四章七項で扱う精神作用は、その話題が身体との関係であることから、主として感情を指していると考えてよいかと思います。『論文』の中で、感情はネガティブな意味合いで使われていることが多いようです。例えば「感情もしくは利害の衝突」とか、「感情主義」「感情的道徳」などです。

しかし、一方で、「理性及び感情の調和」（⑦二二）は比較的ポジティブな形で使われていますし、引用文中ではありますけれども、道徳的感情は他者に対する寛容的精神を示しています（⑦一〇四）。それから、慈悲心を表現する「最高感情」（⑦八六、八八）というのも使われています。そういう意味で感情を扱っています。第四章ではありませんが、第六章三項の第三節は、「人類の進歩における情意的分子の肝要なること」というところですが、そこでは「人類進歩の原因は心的感動である」が引用されていて（②三〇二）、感情の積極的意味を認めている点は注目されます。

先ほどの心身相互作用と健康・長寿との関係で扱われる感情は、主にポジティブな感情、「楽しい」とか「生き生きしている」とか「人生に満足している」などですが、そういう感情が健康・長寿に関係しているということが現代の医学や心理学では分かってきています（大竹恵子二〇一〇、二〇一九）。私自身は、モラロジーの真骨頂はどちらかというとフランクルに代表されるような人間存在をホモ・パティエンス（苦悩する存在）として捉える、そういう立場を大切にしたいと考えています。それは「もちこたえる力」ということですから、モラロジーの原点として大事であり、むしろそこに真骨頂があるとは思っているのですが、一方でポジティブ心理学とか幸福学の研究の重要性は認めていかなくてはいけないと思います。

六　感情研究のこれから―ウェルビーイング研究と幸福学

今、雑誌『れいろう』に毎号書いてくれている慶應義塾大学の前野隆司教授が示す「どうしたら幸せになれるか、そのメカニズムの解析」、これには何よりも「幸福になる」ための動機、方法・手段がとても分かりやすく示されているのではないかと思います。

それからもう一つ、髙橋史朗教授が道徳サロン一一一でウェルビーイング研究や幸福学の重要性を指摘していますが、その中に京都大学人と社会の未来研究院の内田由紀子教授の研究が引用されています。彼女が『これからの幸福について』という本の中で触れている、ウェルビーイングには地域差があるという事実のことです。

つまり、幸福と感じられる要素にも地域差があり、例えば、日本の若者は協調的な行動で幸福感を味わえるが、北米の若者は個人の自由を重視して、自己価値を実現する獲得的幸福感を重視する。このように、日本の学生と北米の学生は、こういうことで幸福感を感じる、その内容が異なるというのです。髙橋教授は、むしろこの日本的な協調的幸福感のほうがこれからは大切なんだと道徳サロンでは述べています。

それから、ちょっと蛇足になりますが、感情研究のこれからの課題ということを最後に触れたいと思います。先ほど大野先生が、これからのモラロジーの研究課題としてＡＩのことに触れていました。今後、麗澤大学にも工学部ができてこのＡＩ研究がさらに進んでいくことが期待されますが、ＡＩと感情が微妙に絡んでくることに最後に触れます。

いわゆる二〇四五年問題、つまり二〇四五年に人間の知能をＡＩが超えることが起こるだろうということを未来学者のレイ・カーツワイルが言っています。それをシンギュラリティーと言いまして、技術的な特異点のことを指します。それが二〇四五年問題です。二〇四五年問題の一番大きな問題は、企業の講演会などで問題にされているようなＡＩに職を奪われるといったことではないのです。それは二〇四五年より早くなるかもしれませんが、ＡＩを組み込んだロボットが自立型に発展し、感情を持つようになったとしたら何が生じるのでしょうか、という問題提起なのです。

人とＡＩロボットの大きな違いは感情の存在であるというのです。感情は人が人であることを示す最後の砦であろう、こんなことを感情心理学者の佐藤德さんが指摘しています。「感情心理学者は、まだ未解明の感情の本質をネガティブな感情とポジティブな感情のバランスこそが人を人たらしめていること、曖昧であるからこそ物事がうまくいくことをＡＩ技術者に提供していく責務があるのではないだろうか。このためにも感情研究を推し進めなければならない」（佐藤二〇一九、九〇―九一頁）ということで、佐藤さんが感情研究の重要性をこういう形で最後述べているわけですが、そういう意味で、廣池先生も精神作用の感情ということに注目したということは、非常に先進性があったというふうに思います。というのも、感情とか幸福というテーマを心理学はほとんど扱ってこなかったからです。感情はむしろ理性を妨げるものとして捉えられていたので、感情研究というのはどちらかというと抑えられてきました。

ですから、日本に感情心理学会ができたのもここ十数年です。非常に歴史が新しいのです。そういう感情に、もちろん古代のギリシャでは、哲学的な意味で、心の働きとして注目してはいましたが、科学として感情や幸福ということに取り組むことはなかなかありませんでした。それに明治の後期あたりから注目して、この『論文』に取り入れたという廣池先生の先見性

は認めていいのではないでしょうか。

七　まとめ

廣池千九郎は、精神作用の科学的研究として心理学が重要だと考えました。それから、心の働き、精神作用の有用性を実証するために心身問題、心脳問題を提起しています。そして、精神作用の因果律を示す心身相互作用の研究は、精神神経免疫学という形で発展していて、これからも注目していく必要があります。さらに、心脳問題を発展させて人間の心の発達から精神作用の優位性を示して、「心一つにて決定」の結論に到達しました。

それから最後に、感情研究に注目したということです。廣池先生の心身相互作用の議論はそもそも感情研究でありまして、感情の作用に注目したことはすごいことだと思います。これからもウェルビーイング研究として発展しますし、先ほど言及したＡＩ問題とも絡んでくるので、これから注目していきたいと思います。以上で私の発表を終わらせていただきます。ご視聴どうもありがとうございました。

参考文献

阿部恒之、二〇一九「感情の理論」、日本感情心理学会（企画）、内山伊知郎（監修）『感情心理学ハンドブック』所収、一四—二四頁、北大路書房。

池見酉次郎、一九六三『心療内科：「病は気から」の医学』中公新書二九。

池見酉次郎、一九七三『続・心療内科：人間回復をめざす医学』中公新書三四六。

池見酉次郎、一九七七「「道」としての心身医学」『モラロジー研究』五号、五一—八八頁。

小山高正、一九九〇「精神作用が肉体に及ぼす影響—生理学・免疫学の視点から—」『モラロジー研究』三一号、一四七—一六〇頁。

前野隆司、二〇一三『幸せのメカニズム—実践・幸福学入門』講談社現代新書二二三八。

日本感情心理学会（企画）、内山伊知郎（監修）、二〇一九『感情心理学ハンドブック』北大路書房。

大石繁宏、二〇〇九『幸せを科学する—心理学からわかったこと』新曜社。

大平英樹（編）、二〇一〇『感情心理学・入門』有斐閣アルマ。

苧阪直行・越野英哉、二〇一八『社会脳ネットワーク入門—社会脳と認知脳ネットワークの協調と競合』新曜社。

大竹恵子、二〇一〇「感情と健康」大平英樹（編）『感情心理学・入門』所収、一九九—二二三頁、有斐閣アルマ。

大竹恵子、二〇一九「感情とウェルビーイング」日本感情心理学会（企画）、内山伊知郎（監修）『感情心理学ハンドブック』所収、三三六—三四七頁、北大路書房。

佐藤徳、二〇一九「感情心理学の潮流」日本感情心理学会（企画）、内山伊知郎（監修）『感情心理学ハンドブック』所収、七八—九四

頁．北大路書房。

シュワルツ・M&ロンドン・A、二〇一八『神経免疫学革命：脳医療の知られざる最前線』松井信彦（訳）、早川書房。(Schwartz, M. with London, A. 2015, *Neuroimmunity: A new science that will revolutionize how we keep our brain healthy and young.*)

Song, C. and Leonard, B. E. 2000, *Fundamentals of Psychoneuroimmunology*. John Willey & sons, Ltd.

立木教夫、一九八八「広池千九郎の「精神作用論」に関する一考察―現代の「心‐身・心‐脳理論」との関係において―」『モラロジー研究』二七号、一三一―一六〇頁。

立木教夫、二〇一四「廣池千九郎、実験心理学を学ぶ―元良勇次郎、松本亦太郎に連なる心理学者たちとの交流―」『モラロジー研究』七二号、一〇三―一二〇頁。

立木教夫、二〇一八『心‐脳研究とモーラルサイエンス』麗澤大学出版会。

内野由紀子、二〇二〇『これからの幸福について―文化的幸福感のすすめ』新曜社。